

(28) 最も曖昧な文献としての聖徒伝（『反キリスト者』の 28）

「福音書」ほど読むのが困難な書物はない。また、そもそも「聖徒伝説」を「伝承(Überlieferung)」と呼ぶことはできない。「聖徒の物語」は「最も曖昧な文献」である。それに「学問的方法」を適応することは、他に「原典(Urkunden)」がない以上、最初から非とされると思われるし、単なる学者の「暇つぶし」に過ぎない。ⁱ

(29) 実在性に対する本能一憎悪（『反キリスト者』の 29）

「救世主の心理学的型」は、「福音書」のなかで歪められ、「異質の性向」を背負い込んでいく。それはちょうどアッシジのフランチェスコの「心理学的型」が彼の「伝説(Legenden)」のなかに保存されているのと同じ状況にある。その場合、「彼が何を行ったか、何を語ったのか、いかに死んでいったのか」ということ「真理」が問題ではない。「彼の型」がそもそも想定されるのか、またそれが「伝承される」かが問題なのである。ⁱⁱ

「福音書」から「或る魂の歴史」を読み取ろうとする試みは「嫌悪すべき心理学的軽率さの証明」である。ルナン(Joseph Ernest Renan;1823-1892)は、イエスという「型」を説明するために最も不適切な二つの概念、すなわち、①「英雄」と②「天才」という概念を持ち出している。ⁱⁱⁱ

まず、①「英雄」という概念ほど「非福音的」なものはない。「福音書」においては「格闘すること」すべてに対する「反対」が「本能」になっている。そして、「抵抗に対する無能力」が「道徳」となっている。「悪しき者に逆らうなかれ」という言葉は「福音書の最も深い言葉」であり、その「鍵」である。そもそも「福音」とは「真の生命」、「永遠の生命」が見出されていることである。そして、それは「約束」されているのではなく、まさに「そこにあり、汝らのうちにある」。すべての者が「神の子」であり、「神の子」として平等である。このような「福音」を伝えるイエスは「英雄」という概念とは相容れない。^{iv}

それから、②「天才」という概念に関しても誤解されている。そもそもイエスが生きていた世界では「精神」という概念も、またわれわれの「文化概念」も全く意味をなさない。ここではむしろ「白痴(Idiot)」という言葉の方が相応しい。「触覚」が病的なほど「敏感」になる状態がある。その場合、「堅い対象」に触れたり、掴んだりすることを恐れて後ずさりする。そういう「生理学的習性」を「究極の論理」に翻訳すると、「すべての実在性に対する本能的憎悪」、あるいは「捉えられないもの」や「把握できないもの」への「逃避」となる。すなわち、「内奥の世界」や「真なる世界」、「永遠の世界」に居つくこととなる。^v

(30) 実在性に対する本能的憎悪（『反キリスト者』の 30）

ここでは「生理学的実在性」が挙げられ、そこからキリスト教の「救済」の教えが説明される。「生理学的実在性」とは「実在性に対する本能的憎悪」であり、それは「極端な苦悩感受性や刺激感受性」の結果である。この「感受性」は「嫌悪」や「敵意」すべてを「本能的」に排除する。これはあらゆる「反抗」を「耐えがたい不快」、「有害」と感じて、「快」あるいは「愛」を「もはや誰にも、禍や悪にも抵抗しないこと」に認めることである。これらはいずれも「極端な苦悩感受性や刺激感受性」の結果である。そして、それは「徹頭徹尾

病的な基盤」における「快樂主義」の展開であり、これに近いものとしてエピクロス主義がある。エピクロスは「典型的な頽廢者」である。この「苦痛に対する恐怖」、すなわち「極めて些細な苦痛に対してさえ恐怖」を感じることは「愛の宗教」に行き着くほかはない。^{vi}

ⁱ Ibid., 28, S.198-199

ⁱⁱ Ibid., 29, S.199

ⁱⁱⁱ Ibid., 29, S.199-200

^{iv} Ibid.

^v Ibid., 29, S.200

^{vi} Ibid., 30, S.200-201